

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18530396

研究課題名（和文） 明治期の東北地方における女子ミッション教育の社会史

研究課題名（英文） Social History of Girl' s Missionary Education in Tohoku Region of Japan.

研究代表者

片瀬 一男 （Katase Kazuo）

東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号：30161061

研究成果の概要：本研究では弘前女学校を事例に、明治期の東北地方における女子ミッション教育の歴史社会的検討を行った。女学校に歴史的に期待されてきた役割は、地位達成の資源となる学歴を付与するより、西洋的教養や家政関係の実学を身につけさせ、婚姻ネットワークを通じて社会関係をつくることにあった。また女学生自身も、卒業後、同窓会ネットワーク（ミッション系の場合、これに教会のネットワークが加わる）などを通じて、地域の文化や社会関係を維持・発展させていたことが明らかになった。また卒論の内容分析からは、明治後半のナショナリズムの基盤が市民的価値ではなく伝統的価値にあることが示唆された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	600,000	4,100,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：女子教育、ミッション教育、教育史

## 1. 研究開始当初の背景

東北地方は、長らく文化的に後進地域とされてきた。加えて、戊辰戦争以来、近代政治史においても辺境に追いやられてきたが、その東北においても、明治以降、西欧文化を容しようという動きがみられた。

とくに弘前学院には、明治32年から35年に

かけての本科生の卒業論文が残っており、教師による採点やコメントだけでなく、族籍や父親氏名も附されている。そこには、ミッション教育に基づく女性の自立や社会の進歩・改良と言った理念が謳われている。そして、少なからぬ卒業生がその後、キリスト教に基づく地域活動を行ったり、教師など地域のリーダーとして活躍したことが、『弘前学院

百年史』などには記録されている。

## 2. 研究の目的

東北地方における西洋文化の受容と変容を女子ミッション教育を手がかりにか考察する。具体的には、ともに明治19年に設立された宮城学院(宮城女学校)と弘前学院(弘前女学校)を事例に、(1)女子教育のカリキュラム、(2)女子学生の出身階層、(3)卒業生の到達階層・地域文化の変容に果たした役割、などを明らかにする。本研究は、彼女らが東北文化の創造・継承・変革に果たした役割を検証することによって、東北地方の近代化の過程を解明することを目指している。

## 3. 研究の方法

まず、弘前女学校の『百年史』をはじめ、一次史料であるミッションナリー・レポート、カリキュラム、学籍簿、同窓会名簿、校友会誌などの文献史料を収集し、そのテキスト分析をした。また、青山学院資料センターが所蔵するミッションナリー・レポートには、弘前をはじめ日本各地の布教事業や学校経営の状況が毎年、記載されている。その翻訳・読解を通じて、明治期のキリスト教文化と日本社会の関わりについて明らかにした。さらに卒論については、Autocodeといったテキスト・データを計量的に解析する手法を用いた。

## 4. 研究成果

弘前女学校の教育理念はキリスト教を中心に西洋的教養を身につけさせ、社会関係をつくることにあった。また卒業生自身も、卒業後、同窓会ネットワークや教会のネットワークが加わることなどを通じて、地域の文化や社会関係を発展させていたことが明らか

になった。すなわち、

(1)まず弘前女学校卒業生の卒業後の移動というものは、限られた資料からの把握の限りにおいては、①地理的には東京などの大都市圏への移動は少なく、②進学については、青山学院や宮城女学校といったミッション系の学校を除けばあまり多くはなく、③本人が就く職業は大正期には教師が中心であり、昭和期には「職業婦人」的職業への進出もみられる、④先行研究の事例と比べると、比較的結婚年齢が高い、⑤夫の職業は都市新中間層的なものが多い、といった特徴がみいだされる。

学校による卒業生調査や同窓会による調査は、地元に残っている卒業生ほど把握しやすく、対して他出した卒業生をつかまえにくいという性格をもっているため、安易には判断できないものの、全体的にみれば卒業生は地元すなわち津軽地方に定着する傾向が強かったといえる。

(2)次に弘前を出て、東京に学び、その後アメリカでの生活を経て再び東京で生活した卒業生(元教員)のライフコースからは、学校や宗教を通じて形成された人的ネットワークが、移動の契機になり、そして移動先での生活をサポートするものとしても働いている。

本研究で検討した女性の場合には、移動がひとつの「ミッション」としての意味をもっている。かつての教職から、伝道や家業、家事や育児といったものが宗教的な意味をもつものとして捉えられている。病気といった困難に際しても、信仰が大きなよりどころとなっている。そしてこうした観念は、同窓会誌というメディアを通じて、同窓生や在校生にも伝えられることになる。

そして、彼女の移動の支えとなったネットワークを、彼女自身も構築しようと奮闘する。

その活動は、ミッション・スクールに特化しない、学校同窓会に共通したものだといえる。活動においては、祈りや讃美歌といったキリスト教の儀礼が取り入れられ、言説にもその影響がみられるが、在京同窓会のあり方は、学校縁に宗教縁を加味した形での「疑似地縁的結合」に他ならない。

また卒論の内容分析からは、明治後半のナショナリズムの基盤が市民的価値よりも伝統的・家族的価値にあることが示唆された。すなわち、まず卒論においては、伝統的価値

<sup>ナショナリズム</sup> や <sup>リスペクタビリティ</sup> 国民主義よりも市民的価値観について言及されることが圧倒的に多かった。明治期日

<sup>リスペクタビリティ</sup> 本に西欧の市民的価値観を持ち込んだ主要な担い手が、ミッションであったと考えるならば、ミッション系の女学生の卒業論文にお

<sup>リスペクタビリティ</sup> いて、市民的価値観が多く表明されることは

当然のこととはいえる。ただし、市民的

<sup>ビリティ</sup> 価値観への言及は、頻度の点でも構成比率の点でも、卒論が書かれた年次を経るに従って増加する傾向はみられた。この点ではミッシ

<sup>リスペクタビリティ</sup> ヨン女子教育における市民的価値観の教授は、年々、深化したことが推測される。

次にこの3つの価値観について相関をとると、市民的価値観は伝統的価値観とは弱い

<sup>ナショナリズム</sup> 負の相関、また国民主義とは強い負の相関関係にあった。これに対して、伝統的価値と

<sup>ナショナリズム</sup> 国民主義とは正の相関を示していた。このことからすると、今回の卒業論文の内容からみ

る限り、少なくともこの時期、弘前女学校の <sup>ナショナリズム</sup> ミッション教育において国民主義に結びつ

<sup>リスペクタビリティ</sup> いていたのは、市民的価値観ではなく伝統主義的な価値であった可能性があった。このこ

<sup>ナショナ</sup> とから見る限り、明治30年代の日本の国民

<sup>リズム</sup> 主義は、同時代のドイツやイギリスとは異な

<sup>リスペクタビリティ</sup> り、市民的価値観というより伝統的・家族的価値に基礎をおいていたと推測できる。

さらに、ミッション系女学校が短期間で撤退した山形県米沢市との比較からは、弘前の場合、財政および人材・地元の支持に恵まれたことがミッション教育の維持・発展を可能にしていたことが推測された。すなわち、まず財政基盤については、弘前にはミッションがリンゴを持ち込み、すでに藩政期に麻などの商品作物の販売を通じて台頭していた新興ブルジョアジーがキリスト教に入信し、リンゴ農場を農業資本主義的に展開し、その潤沢な資金を弘前女学校につぎ込んでいた。これに対して、米沢に牛を持ち込んだのはミッションではなく、外国人の英語教師であった。また、米沢では江戸期の藩政改革において、武士階層が各種商品作物・工芸品の生産にあたり、農民層から新興ブルジョアジーが勃興する余地がなかった。津軽家も上杉家も女学校を支援したが、前者には地元の資金が回ったが、後者には資金が不足していた。

人材・地元の支持に関しては、米沢英和女学校の教師となったのは米沢中学卒業生であったが、同校の生徒にはキリスト教や洋学に対する反発が強かった。これに対して、弘前女学校には同じミッション系で藩校と慶応義塾の流れを汲む東奥義塾からキリスト

教徒の男性教師が供給された。このように、同じ東北の都市であっても、その経済的・文化的経緯によって、洋学やキリスト教を受容する文化的背景に差異が生じていたとみることができた。

さらに、現在の弘前学院聖愛高校同窓会の協力を得て行った同窓会役員への生活史調査（ライフヒストリーの聴き取り調査）からは、学校文化の影響を明らかにしてきた。役員<sup>の</sup>の定位家族がもつ資本の傾向と聖愛進学との連関、卒業後における学校縁をもとにした社会関係資本の形成、ミッションスクール特有のキリスト教育の影響をインフォーマントは意識している。1950年代から60年代にかけての女子教育は、家庭内資本との関連が強かったこと、ミッションスクールのキリスト教教育が、キリスト教の信仰を深めるために機能した面よりも、社会貢献という活動の促進を促し、地域社会や社会そのものについての意識を高めてきたと指摘できる。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

片瀬一男, 投稿中, 「東北地方における女子ミッション教育研究序説」 『社会学年報』 37号

〔学会発表〕（計1件）

片瀬一男 「津軽<sup>ひと</sup>の女の<sup>ライフコース</sup>人生」 大阪大学21世紀COE「社会変動とライフコース研究会」報告  
2007年9月27日

〔図書〕（計1件）

片瀬一男編『明治期の東北地方における女ミッション教育の社会史』平成18～20年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））研究成果

報告書

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

片瀬一男 (KATASE Kazuo)

東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号：30161061

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

遠藤 恵子 (ENDO Keiko)

米沢女子短期大学・教授

研究者番号：10132002

佐藤 直由 (SATO Naoyoshi)

東北文化学園大学・医療福祉学部・教授

研究者番号：00125569

羽瀨 一代 (HABUCHI Ichiyo)

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：70333474